京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成 29 年 8 月 9 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　文学研究科

職 名・学 年　教務補佐員

氏　　名　池 田 彩 夏

助成の種類	**平成 29 年度 ・ 国際研究集会発表助成**	
研究集会名	国際幼児言語研究学会第14回大会 (IASCL2017 : 14th International Congress for the Study of Child Language)	
発表形式	□ 招待 ・ □ 口頭 ・ ☑ ポスター ・ □ その他( )	
発表題目	Shift of Japanese Mother's Infant-/Child-Directed Speech	
開催場所	フランス、リヨン、リヨン第2大学	
渡航期間	平成 29 年 7月 16日 ～ 平成 29 年 7 月 23日	
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有( )**	
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円
	使用した助成金額	300,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空賃 157,400円
		学会参加費 63,700円
		滞在費 81,322円
		空港までの移動費(国内および現地) 11,575円
		合計 313,997円
		上記に充当
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびはご助成いただき、ありがとうございました。助成をいただいたおかげで、参加をあきらめかけていた学術集会に無事に参加することができ、また、国内外の研究者との有意義な交流をする機会を得ることができました。	

成果の概要／池田彩夏

京都大学教育研究振興財団助成事業より、若手研究者国際研究集会発表助成を受け、フランス・リヨンで開催された第 14 回国際幼児言語研究会（IASCL2017 ： 14th International Congress for the Study of Child Language）に参加した。本学会はリヨン第 2 大学の主催のもと、5 日（2017 年 7 月 17 日～2017 年 7 月 21 日）にわたって開催され、口頭発表とポスター発表をあわせ、約 500 件の発表が行われた。国際幼児言語研究学会は、3 年に 1 度開催される、乳幼児の言語研究に関する国際学会で最大規模のものである。また、言語学心理学、脳科学、シミュレーションと言語獲得に関する様々な分野の研究者が集まる学際的な学会である。乳幼児の言語発達を研究している報告者にとって、本学会に参加することは、乳幼児の言語獲得研究の最新の知見の収集、海外の研究者との意見交換の場として貴重な場であった。

報告者は、学会 2 日目のポスター発表において、Shift of Japanese Mother's Infant-/Child-Directed Speech というタイトルで発表を行った。乳幼児の言語獲得の学習源として、養育者らによる言語入力が注目されて久しい。養育者らによる乳幼児への言語入力は、大人向けの発話とは異なり、Infant-/Child-Directed Speech（IDS/ CDS）と呼ばれる特殊な話しかけ方をすることが指摘されている。従来の研究では、IDS/CDS の持つ様々な特徴（e.g., ピッチが高い、抑揚が大きい、ゆっくりした発話速度、育児語の使用）およびそれらが与える乳幼児の言語発達への影響が検討されているものの、乳幼児の発達に伴う IDS/CDS の変化という視点が欠けていた。これは、IDS/CDS の乳幼児の言語発達への影響を検討する際に無視してはならない観点である。そこで本発表では、日本人養育者の IDS/ CDS の、子の発達に伴う変化に注目し、定量的かつ包括的な分析の結果を発表した。特に語彙的、統語的変化に関して様々な分析を行った結果、2-3 歳の間に語彙的にも統語的にも大きな変化が起こり、成人向けの発話に段階的に近づくことが分かった。発表を聞きに来てくれた参加者からは、重要な研究であると、概ね肯定的な評価をいただけた。IDS についてのレビュー論文を執筆しているマニトバ大学（カナダ）の Soderston 博士や IDS のメタ分析を行っている CNRS（フランス)の Cristia 博士と議論できたのは非常に有意義であった。また、言語間比較の必要性を助言された。

国際幼児言語学会への参加は初めてであり、自分のポスター発表以外での多くの学びがあった。印象的だった発表は、null results についてのシンポジウムである。実験を実施し、有意な結果が出ないことは研究を進めていく際に避けては通れないことであるが、null results をどのように解釈すべきかは、重要な問題である。また、成果発表される研究の多くは有意な差を示すものであり、有意な差を示さない研究は発表されにくく、他の研究者の目に触れる機会はめったにないが、そこには重要な示唆も含まれているはずである。null results という研究者からは忌避されるトピックに踏み込む挑戦的かつ刺激的で、考えさせられる内容であった。言語獲得研究においては、言語普遍的な獲得過程及びそのメカニズムの解明と共に、個々の言語に特異的な発達過程やメカニズムの解明が必要とされる。そして、その両者の実現のためには、様々な言語における発達知見が必要である。しかし、広い分野を対象にした国際学会では、普遍的な発達を扱った研究が好まれるため、個別言語の獲得研究の意義は認識されにくい。乳幼児の言語獲得に焦点を絞った学会だったからこそ、有意義な交流、意見交換が可能であった

と考えられる。

　このような貴重な学会参加の機会をくださった京都大学教育研究振興財団ならびに推薦を頂いた京都大学文学研究科の板倉昭二先生に感謝申し上げます。